あゆひ抄　四

ホ 2
4238
4

東京學校圖書
利 373
門 號 巻
ホ2 4233 4

あゆひ抄巻三目録

十九家第二下

乃家八
何乃
何乃とも
何乃りう
邊家九
何う
何へ
良家十
何ら
能義家十一
何のミ
何ものわ
中ものわ
末ものわ

何まで 若まで よろしまで
陁尓家十二
何ふ
何さへ
余利家十三
何よりか 出るよりか 出さるよりか おくよりか
何よりに
何つら
何ぬのゆゑ
那牟家十四
何なん

何もう
何よりら 名より 装より
何ぬのから
何ゆゑ

碁登家十五
何ごと
毛天家十六
何もて 若もて まじかもて
加保家十七
何がほ
那加良家十八
何がら
何がらく何がらに
何ますく
加天良家十九
何てら

何して 若して まうして あゆひして
何まで

あゆひ抄巻三目録終

あゆひ抄巻三

北邊口授　門人　吉川彦富
井上義胤　筆受

十九家第二下

乃家

何乃 何ハ右に孫也。まことにハ其の世立たかふ物の末を云く。此きのすゑをあかり乃すさひ有るのなやまるともなむあり

何のこれの

なと異なれる同。但異りハ詞をとのへて のといひ詞のいときなひかれまる時なし がといふべきへて面乃なる日といへ、面のなきといふにひきよハこれ のと乃ならむこと人乃わの惑不及ハ分又音する のごとくとよむまめる 乃あかこれをゆくのといふべきて のやうにと異なるべし

まことはこれらの君乃なきて秋もまたきえて消やらん
風よえ荻はわかきしらすの曲をなきて雲井君のへ宿の
黒かつきてハ人のといひ出にて人かといふも宇まれ
[の]との名をいひ位文をいはてこれ脇なるやしるひとあれと
君の句この首といひ上世のたいを出ていひされと今をもよめと
けふのかえすてはいひかくるとやなかに百人宇治拾遺
さとの秋をめでたくるのみと無秀乃ようち書をいひて
侍のなりちてざるとこそいふ今すなれと女の作つり
とのみもこのといひてんはみのとありての作も[乃]ハ
やしめる詞となかてありけるを物のへし○古今集吹渡る
小秋風をきゝをともなかれも出のひとの火のけふ

[の]はめはなるつきこの也このうち撰集とて
玉葉
ゆふ乃日影のうつりかさしまてのたのしみの声よ風あるの
門
何とりくむしく秋のゆふらんは世まこそいふまれなる乃
風雅
緑にて極楽ハかくこそもれぬとたきさかしく人家の
なれハ源氏物語乃巻實方堀川女房長能好忠二首
順二首赤染衛門相模伊勢大輔道信ハ定家雅經
卿とその句かたをかはかを作かわられ古今の寄そて
めぐみ今はなくよみ手をまとるハ今のうくやかまきあかるも也なり
五百番歌合てハ家隆て入まてハ月をみるのめいはれぬるの
光のますよりは勇乃これと顯昭判して吹きものいふを
風をきゝものへ人しもなれるのもうさすのか風く

傍ニ與あかと云ふ。又後拾遺ニいつもこよひのあかり
ここ夜かはらぬ誰の桜かゝなつる。此乃の字なりとも
あれと乃つめてはさ夜のゆかりの○夜の夜の字とすれと
といふ寄夜のかへといふ字に物のき主をのとよめるそ
志らめすてゝやまぬ。はなしく一首事をさせんと思ひて
うつろふとよみゆきたるかなきによみ。悪しき盛りのわさらぬ秋の
共これなき法のとなふることゝ。終草子なみかめて。秋をわさ
ちるをそそよまむのゝ字長潔也とのいふ。つまり字寸
つき乃なりなす○又世のつれ乃とや天物なりんけるとも

何乃とも 何ハ名也 見てりふとうむへき所ニあかゝ。里へてと一言のは
川合のハ来てありとよめるのなり 里同

とや物へし。その字よなるわ所ゆ
枯まりの[十一ショニ]さくすらむ。別なきはまめむやはて思やわすれん
後のきりゆく世の人日の[ニショニ]わきかのをあしの山へとかのあやすの承

何乃みる 何ホ又同 見つるとよむへき所よあかゝ。里がきゆる事と
四ゆ乗し

拾遺集 あひみても秋の乃[ガサセルノ]は秋なりし事をとどる細乳
いとしまくゆふかぬまほのそれなきさのゝや面影なる
あのゆふまにいむや。上代何をも是をもかの秋のる
こられと。移しハ物をそ承へてのことよめり

何の 何ハ若ヘ脚ヲ麗也 何乃と咲けるてうけさあもかゝ。いとをつゝ
うつくす。上世すゝのの事もつまられ。まことに因説ニハ洋ゝる

へし 何の ふゑのうけてる事は拍子の をあらそて それ〳〵とさす
詞なりわの 天の いへの 物までこる事とりても 人を
よひつゞきのる詞なれど その人のと定まりたる う といへり
おなじの里言にあてても 滑るに 里言同 但 引處をうけて
のが と里言すべし
於 こゝかしこの いつくにうすくれなゐに 花は 里をはなさんとを
なのが 人は 人もふりまさまず なれ らぬ 在るまゝにこそあれ
於 苗まつ人をあするがしき 物を 色なの ねを 液するなり
引處をうけたる 皆 此二首の ごとく なめる ある 人をとりは
指さし のかくてよむなり
かくる 花と 苗をとうけたる 何乃 とのつゞいた 宮の 何首は

萩の花 花の花をとりたるやうに成し あかりのなめる 命かは
但上なれりたるはうたてあやうく 是て ひとつ松のえにをかひ
の 松のえとこれよるめりくひをあわつかふ 御来あるまゝにある
○ 何の 何さ とりたる中にも 中若 ゆたかなるまゝに 皆此例也
美隊 よくえし

邊家

行へ 何ハ落のたる方所なり

ゆく也也 へ するから方乃 のあわてそ 万葉 中 へとも行方と
かゝる けりなり 里言でもいふ也 但 何は 何へ 乃かくにふよくねまきまな
へし 京の人を 何はといふまきをも 何へ とのといふ都の人は 何へ
とは へすをとも 何はといふにありし いつまでもつゞきて るなりく

きこしめし京のえかとよのいへりきし。右中人のいふを異とみてく
とへるまるや。儒者書の訓点などを「何へ」とよみよむゆうして。素子なる
おきりなとのこよみせしか。異「何の方へ」「何さまへ」といふ心也
まるゆくかのてよみけるつねてこし［古今］古今集にて歌よめる
［後］あらぬれそおもへ［千載］あおる君よりまとのかすらうれとへ［古へ］いもうん
［日］よこしかまこ○人［千載］おもへ［古今］神のれまかゆくさきの方を我のぞみ明ける
［拾］遺の人あるさえ［廿六］ひわのれちを拝むこ後そへ時いらりゆき
［日］月のよさ雨かくさくまし世のなとたしへ［古へ］あるをせむある かな
古今詞まりあわまのうへ字をかいさしとらの所まぬそれか
公のそ家へかへよりあるそまおへまのよる時をこてよめる
かひの里へまかりける時道にて作る「へ」とつらめかふてよ

［は］ありけらふくらのなりけることのいかにかむつかしきりゆかむ
とらのかり文にも見ゆるも「何と」「何へ」などいふく所しくはのへ
まそど後世ふへ「何へ」といふ詞あまりの所なる心うすかりとなくや
をきしくよまるまじの近昔よりおまりの詞をえてたてはと
於こまれなるものなかり○古きわのまことるめこてやかてを
よめるは。新古今菅家の御歌に数へ字をいふ人のかをと
よるもの歌ひ又古きより世をすてて山の入人とものよにの風あま
こそめ山後へいそんはてともよめるもとむのへこそかれは数ある
こそ見へのこわおあもひなる事なかりの難し

良家
らら
何はは右御歌集の外補の未在のなき也 むつかしきら等の字をとりて「ら」といふ事なる

あてらるゝ詞のさし事に此字を用ひ時によくわきまへべし其のハ
りなり其哥も上世の詞にて八代集にハいれてすくなし俳
諧にハ用ゐて其詞と云へるなり古今の詞書にあり古今
土左日記にもあり是等ハ其の字の文字につゞけて書たるには
今案ずるに是とも也かく字をうけたる詞にてはなし二條家より
志き也よハ字をうくる事ハ上代よりあまりになし
かくよめるを是也古きを後撰の[へし也]もこれ有とも古歌に見
哺にハわたらず古を捨てかくよみ給へる也
らにハ今親にある在にハよみもゐしか拾遺集にある歌にも
さりとてハ詞を是に用ひ文字にて其てハそむきある
云任て集に用ゐるもあまりにならずなすとよみ侍るも

万葉に字をつかひたる事のことしかく御字をうけたる
とさたの字にかりをうけたるとし[やるぞ]里すまひ莚舗を
うけたるに里[てい]とい字也在の字をおひそとよみて元人の
まや上代の詞なるを今の世にゆるさるゝとそすぐに大の里
言葉にあつかひしとも思ひしる

能義家

のハ

のハ名の字につき比喩の心鹿
往又在の字のとおなじ
里[ぞがれ]とひ又[ぞつゝの]といふ
一にもちひておなじことハりとらへ詞也
ひとりのみ(バカリ)なるもしるしとりなる人へ[illegible]宿に梅さく花のと
あさのひにゆきのふるかもわかとくへ人やうひきぬの(バガリ)さりげなく
(集抄)ほとゝぎす鳴てそやみる世のまにまの(ヅカリ)[illegible]

又のゝをとめくしてなからるからめてこそあねをとけまなそこのなし

事なりてそのかとやうねていよゝかし。のゝをとらむゆゑなり

又事の後をとうる時ふぞるも他ゝゆゑあるべし

おきつ浪あらみのをまさる字乃ぞらへ

なけきにゝそのゆゑはそてあし山のゝぬ乃のゆなるめ

まて。	て。	ちどんと（ウト）	すとりと。。（ヌト）	なをこそうけ	こそ（ユキ）	こそ（何ナキテ）	や（カ）	やと。（カヤ）

なもり（ヂヤ）

なあめゝまし（ニフアルモノヂヤ） 事なし（デナイ） しゝて（デ） もゆの班（サテモ） なとあきて行きてるゝその見

なかね

ゆゑなり

ゆハ若臥絆章の末 又歩の門麓をとく

ねあまめのなるまゝなからぶかけをさせ

てはこれやをちてもとけをらぬ詞やつきてあめゝをも切る字

こゝ○をとかくさうそめのをとそかみとゆひ。又蹤血をとえそめとゆゑふ

ゆるか。計斗ゝそなのそらめゐるをとめはかをとゆぬを芝

古人色計の字をとゝそ。かきそれ。計斗ハ計乃草のてをみそさへ

ゝるなゝ二例○第一けそりかとらぬ里。又里

言と同しくこゆる所をとぶけざる里とゆゑへし。麓をと被

かのしらぶ里とて

いつそか風なゝ世なかめそいつそかん乃みてのそうまでかまし

あか明のつま形くみえ別るとあつきえかうかゝのいつし

やうつゝみるやうのほとを寄る思ハりかうそ昔ゆかれ

きの我すとゝわかそむそいかあハ梅かりぬるゝかんてちや君

後 春くれいゝそく花ねます我まするそうかの稚ふそ霜ける

そらゝハ（ホドハ）	しそうかま（タダケハカリニ）	けそかの（ホドノ）	そうかまそ（ダケ バツカリ）	そるをと（ノホドダケヂヤサニ）

とおりんかかね

○すゑ二こそといふよみくちの事は本式になりけりをも
はねてよむなといひかけんと思ふべし。これも麗をうけてぞ
のといひかけんといふべし
雲ゐまでかゝれ法ならでみえゆるを人にさえもらふかなや
まてえぞやうちゐえたかのとも逢て君を春の末までそれ
若草の二声をみえそめてとこか思ひ我からうき人にけるもし
右二首の定るはかうのことはあれとよくつめれ給や
凡のこと ぞの 二詞ふ所ことのかはりまふへけ里ぞ
めえはなれといふをみれて二乃ことふにかきこゆ
まこと狭のことをそ無我すゞのえあ河乃をハ事の心を
おほくしていひこそは物乃はまえとも心もてい世とへし

句ごとの上まてけりといへは只其心を用ひらるゝときにある
ふる文をあまたる乃人のことはをもちひて去例のかたと
いひ詞をかくる一段なるをとみをおもしろき二つめえそめ
をききりといひそられおほことわなるもあるえぞれしい紙を読き
かきねをしてまろきをときけりといひ出世歌のこそ
一すぢをわくあめ心ありぞのはちひらつてみえ流にう
ちかるねん乃あ事。古今風ゆゑのもちる紙歌も判くの八
こともかりゝ一段ふ乃心地同集ふ歌らしえるまはすを
あめ事をけはせめてことしてけるめといひ心文路のらを
いふそこ若の気を歌よかかくわへおくしむせにとほ申し待て
行はまそてはる若道若えりをとよめ重くをゝしは人あり

くる時はよろづのかたちさま〳〵ことわざをうけたまはりしかは
侍りて若くはけふの里をもとめてなむ
何まで　こゝまでもいへるなどをいふ也・二例○寸一　若まで　と云
若躰を云　里同
いつまでかのへりいふなかくの秋んなもちはなく世をへぬ世に
えやこそまでゆきつゝ人まかくこそ何まのをすまして見て行まし
まで　はまで　はまで　の又見本抄
○寸二　壯までと　いふ　壯の引靡　文脚とうく　里　くらきまゝ　文　だづんまで
とらふ
秋までハちるらめや堤にはまだしぬはとあまてこけ　ニテ
秋あまでへ山をしまでかくりはわまさなむやともいぬれ

隨爾家

までのまでそ（ジブンニテデン　之ヲ弁ニ何ガシラス）　笑見本抄
世をへいは道もあらまでありぬへかとふ奇ハあつくしとも
それハのこれるまであり又道さへのいとぬ則となりてあるとこれ
ハ道をかへとふ任までふあまとなりとふ也○まで
とほりの又よく似てもちにそかのハ只をひさくはぬらかそ
いふ詞也までハあれとも其躰ふいへる也○すはとく
よむ詞を脚までありて里までといふ詞をまでまでそかの
事を又かよへるやうけるハあれと今ハちの詞かくなりてえふ
ふあ川までハ詞ぞならるとふ心てあるへし○あるくハまでな
までまでふ心田和くハあるへきよ
とくあるのあかりし

何ら 何ハ名目助辞の引靡又继辞也

きる詞也・里言に[きへ][なからも][でも] ちながらをとひあまりそめてのこゝろを摘そく
さらに[不倫]をうけたる時・又かゝるのこゝろにきゝてもやれ
あり時ハ[さへ]とよみてよくはかりて・そのゝを里言も[ふ]といふ人
あり・又謡いさゝめねりひかのあまとも[なりとも]とあそてわ済
へし・そのかけのハ[でも]とかつへきにかなくこゆ
花とのこゝ世をはあるをときこゝ花はちれる風のふくらむ
こゝ山ふき松乃かきかきくさみとやこハ好へ爲のみつゝなか
ちるとハまうくたゝきてねまありをち覚わ若葉さゝなん
これ人ハ花のこゝろまかねなるをことけの影も かゝきてるまかた
春ニ梅つゝくはしなかて花ちるまと見ゆる夢をあ給

さかくゆひのくまいすこゝさとめて志そし水かゝ面影をうつらん
山ふかきの峯のゆ出乃山氏かねにても人のふえくひむくひめのまい
更にねもかひ中江のそよまくれやくふかさのえ化るそよるにをきて
[かふまと] むさきよゝふをいふれハはしぬかけらかふ [をちまと] [同上]
二サヘ[あそま] 二ナリ上モ[あへぬ] 上廿ヘ[あふま] テ廿ヘ[てくま] テト云テ廿ヘ[てとふ] 等見たをれしくらよ
[てくま]ハ只[でも]とつめて里すかちの事なるもあるをと
師さかろ二例をとりて[くちあゝ][あゆますへて]あり
同しこゝ頭とあるまゝ是て北にかりよめへとこ梅かさこゝろ
あるかそ也と人さそしへられき・今ハ萬葉の事也○凡
[ふま]とみて兩ゆひ[さへ]まあるよりかゝハ里まてハねなりて
きうとをと八[なからも]とも[でも]とこゝひねつり心ぬ事

をこかはしらでもとのこしはとこ。なにふしあるへて「こそ」とよむ
なりとし給へし。古今乃慶をすてしるとそ相なさ紀
しよみ乃なぐ私のいりしぬことをあらまてよめる哥也八言れ
「いでも」にあられり。なしとあんとそやりのてよめるうぬ
なるは「ありとも」どろそあてまし。又さつろをかゆうり
ゆるなすして藤紀つてするなとたる間にとれいくかり
よるは「さん」りあるとし。二の里こて一よかるやと味のにへ
○前よりしてうれその斉あちはいはちまず宮みねと
君る寸いほともまうんやとはやこえるなこ「でよ」あるか也

何すら

何ハ君臣御 紫宸の引龍之

「何すら」とも同し。古集「する」「こそ」あひぬらむ
なかなる給かのへし。ちのくは「里でさん」とはさ有り。世御上代

よみあかで。中らる乃人こそふあのこゝよあか

曾丹集

こけてすら（サヘ）ぬるもなきこゑ月をとぬさあかちよて明ぬる府

御堂関白集

寺きのるをいつまてん都すら（デサヘ）物思ひれるらしなるあらんや

拾

君すら（デサヘ）をるとて丸道に入ぬなかなしやなりのなむ思て涌とや
「元にそうき」とよむも。只「にそう」に同し「うて」と「こそも」に同きる
又「すらだ」とよめる御。曾丹集よ二首み哉。是又いまなし

何さへ

何およの「何すら」と切

なりし里「まで」「かまでも」有と又
いかに山かぜのすみちるなへてよるみ（ニデモ）のとてらは月歌
春さめのふる色あかくにいさへ（ニデガ）るつりしもの念思披るる
又「何さへは」「何さへも」とよむも只のうへしはすかりら右の里そよ

あて[さへ]はをますでかさへもをまでもてうりへし。又すまへ（ヲマデモ・ニマデモハ・ニマデガ何ガ末知・ニマデガ何カシラズ・ニマデガ何ヨリモ・ニマデモ・デアロカ・ニマデガ）

をさへはさへいさへそけへそさへそさへや何らん ほんま

おか

文選の賦にも・草木鳥獣若干とをかぞへいひあぐる

事を・古今集に何くさへ事とにかぞへたるを[何くまで]のある

ことは也○[さへ]は只[まで]と心得てよろしかれど・何詞の

[まで]は何まれとて[一もと]の字をそへて見るべし

余利家

何りか

何ハ名所物 辻あの川處也

三例○才一[出るよめり]とも・物をとてる初そぶれ有のよるいふとも

時里同又[わる]とも[よめうる]かくよわ同詞やも大方て

哉よわむりしうとうくるか上ずよりみえ[よりか]おく[かく]もめて

[よりハ][中]とをよめか中世くしよわハ[よるか]あかく[か]かくなかて字

の末よりハあと今ま方とま[よわ]とあとらむ事よ事わると今の里

言すん又[わる]とのそいはく[よる]とにおすまく形そへ今の世へ

まへるおか

今さんと外をくるりわしあ世よお[カラ]おすひそしよねとのこおか

あわえかはさくろくわさうわの月くろわくるる明ぬこの世を

○才二[わくよるか]とえ里[よかはりて]とえ風りて方と[よめか]

とをよめか・志時大里同

なくるおか[ヨリ外二]文しるえ今もかるこゐをあくるを出入音てわくつる外

田く了の有く出をいく見くれく風ぶ。。なかわをに只み高なを形

○第二まさるよりといふは、桜よりは梅はさきやゝおくるゝ桜
よりは梅のはるゝいふ類也。又水よりもきよく紫よりもあか
しなどもけし例なり。此中へえまさりくらべのよりもよりは桜
より雨はわくらかけはなれわかりてよそにおはしてそいひてならべて よりは
よろこぶるものによめるぞ。後乃世にはやうく よりも のことによめるも
こゝろ此中へを移のこゝろ人々のさへそこによはし。畢同
ためしめたる例をしみ動てかゝるふかきよりはさえめづる
此にもよりはからえかれには中にも其の袖さえやどりめぐるも
あらそ物風さへひきはえて秋にのこるよりはすみよりが宿
よりは よりも といへて まさるより 高まさるより のこゝろそて おくより
はるゝこゝろのいきかひをもりの文 しより（タカラ） てより（テカラ） かそへおくり

三例ともに里と同しくまさりてなし。古今集の歌
いせまさの秋風まとふをそ見て。二三例まれにてあるまじとみゆれど
ひとつかなるを例とし重ね ○後撰集に山桜ちらぬ風さそ
こゝにかりやけらうきおりてもあかいくとかれ。此見は里 からて
みたいかやもに 出るより の例あれとかくめくらすはかゝ秋の

例より 例よりは不同し 上せるも 例よりの 一例と同しくも用ることは
むりしゆらるれあるよりは。めるめりしき詞とやかなるしむかるゝの
ゆゑてはよりなすして。兄弟をとかくしてあまあそらかゝ。或きりく
はかくしていつゝさ得するをやむとおくよあるこゝろのこゝろえて
こゝろも。後撰にきこ得のへおもひこきいふよりめんとやよりはある
も。上世中者のおもひこれ人々をこゝろ中にも今これを思て見ゆる

八代集おほくよめる所々に二例あはせて分をまもりて
こゝに物事の見へ入目あるをいふ詞也○第一 若をとらへ 若つゝ といふ
里 にゐつゝて によるとて にかはるとて かゝつて をとりて又仁徳紀
又国臣物(オノカモノカラ子オシ)而泣と云事あり見ればかたちなとして臣の事を
うけていふことあり。又やよひの雨のつゝなをとむも此例なり。茶
筅のつゝの水のつゝのとて又小家の中をひくる
王の御門(カ) かゝつき(カラオヨツテ)世中をなげきつゝ人のあためにへの所かつくるむ
あらまてわれとはつまつる月見ちるこゝろひは所のつゝ(ニアルク)かな
古今見今いそてかへそこのそのれ縁ひ起くおの拙つゝ
かたみとやむとらへ字月はきて かのつゝ と全同じよ見ゆる
との寄り気にてはさをいふべれどとのこゝくあつまるは

ゆふこゝにまれに所々におゆめの中をわかりとしてそ。古代などの見ん
ゆかりつきこそげしびとつ見てもおかしべし
なとい
○第二 紫の川(ガハ)麗 御かをうく 紫のつゝ といふ。里 よりそや とらんとそや
をとつ(ヨリハヤ)むつゝらのきぬを白やちら立なむいほえゆくつらきむ
あふのつらも(トテトハヤ)拙いとくそ見ゆ流れ出のまんことをかけそむへは
カラオヨツテ うつゝ乃 ニアルクト うつゝと タトヘトハヤ しつゝつ 思へなお拙 乃のつゝは 乃家する字
何のつゝし
何は紫の川麗御ゆや。若と思るえみすやしくむかりひつそす
わしあるまゝつゝ 何のつゝ 乃一例了 ゆ わりのくりてまとるまし
何のつゝ乃二例と同じ
すゝれえの松をおかし風(ト云トヤ)くゝのつゝそよらあゆる仲にら浪
松(ト云トヤ)のつゝかくゝきゆ分てするまめを白露とめこゝ人のつゝらん

何かは見ゆる哉（タゾトニ云トハヤ）

賀茂女集又ハ谷のかくれにおひたる花なりやし

かくれては源氏物語のかくれゆくかしこに紫苑物

語ハ源氏にかくれたるまゝ花のさかりにかくれたる

をはかなきあはれなる類ハ古今ハ此ハ何事ぞとて

あはれなどとても　何ともいひかたなり

何ゆゑ

ともいひてこそ　何ハ紫の引（ゆかり）麗又御心　かくれハ此ハ何のゆゑの一例ニ同じ（何ゆゑ）

何をねでかくれど　何ハ何でかく　何ハ何ならねど

なかと思ひてもちりくきこゆ

いつかとありつる今ゆく春のことを紙のかみにこそあやむ（ハ思ケレド）

あきまとよそかる人乃年ゆくつきのあめにいくらも物なり（エヌデハナケレド）

ぬなのみや（ハ何ヌケレド）何のゆゑ（ハ何デ井テ）何の（カ）ゆゑかな物

何のゆゑ乃下ニ引物のことをいひあらはしたるを名

にしてよめるハげに脚をあらはすといへるも同じ也

何ゆゑ

てもおもはぬかたがたゆゑに何ゆゑの名とも（何ハ名也）何のゆゑ乃一例ニ全同じけれども此このうへの

のあはれなり

風（後）をいとはるゝ花のかなしきまで一つにいふよりゆきのかさ（カラフオコツテ）

まつそむかへりをよきてまた物のしめやかにさかしき（カラフオコツテ）

何ゆゑ

何ゆゑ　何ハ名（ゆかり）紫の麗御心　里因

いかなる事か

何のゆゑとも　つゆのゆゑ　ともなみの　手かしはひとえぬるまで

人のゆゑのらにしあらひれるはくいわらつきのやたりひなきれん

ゆゑに　しゆゑを　等かん本抄

何のゆゑ

何は此のゆゑの引　鹿御なり　里くちはをいふ

いつくまゆきてはなれるかのゆゑにみまくほしきといひしかふ

状なりてあふさかのきをうちしてかへりてゆひぬ本ゆゑ

ゑきもゆくにそのうたは、かくとあすにはるまもさてうたわまのゆゑ

ぬまのゆゑに見ぬ本抄

ゆゑ　ゆゑに　こそ　ありしそひなきわさにいふらん

那年家

何なん

何は名所の引鹿状の往在のあるなり　これを中のなんといふ　いなん　あつかふ

まさのらなといふは、といふまさに、けれしてすかにてわけ

碁登家

まつ句のはじめなる詞や、文すゑ句のおもきある所にかくめる

心なり。又宣命の中に哉とあるを見せ、文をあらはしておもきとこゆ

あらはすにゆ。往又在のあひだをあらはす時、里とかくことは

をうつ時（が）とふみ、麻をとうつ時乃がれとかく昔中にも

乃人のつかれよりうつる詞にて、後世にはこそよあるはす

まつくおもくさかなるゆゑに寄せるむ時はのあるす下に（ど）と

するなり

義孝集

六帖

うれしよりかへらまそて玉をつまめやこれなかしとれとよつきさんか

わくら葉かくれてさくらのあさまさるときく人はあまのひさ

つまくすはのあはるこれなかるらむ人なかしとれをおりけるを然く

いかで 何ハ名御装の引靡也 名をうけたる里同自餘ハ里 ひとぞよき

とふべきなにしやがてひとりとふまじものを

雪かきて来ぬ人ゆゑにかへさらむけはひしつつ梅とわきてそ見む

旅なるゝぬれを花にたをりなきとめて見るべくタビゴトニ旅ごとにかへりぬべく

毛天家

いかで 何ハ名装の往也 二例○其一 名をうく 若しにて といふ 持の字也なら以の字の心にかなへり 大きに 何しにて といふ事、かならず山あるかにてすれ

そなたとよみたまへるは事なるに歌の本意とたがへる、何れも

あはれなりともかはりたに まで ハそのあはれもかへりて見るこそあり

して いかにあはれとてこのよにかあり まで ハ心ゆ見 して ハ

よそ見ずかはのまことにあはれなる里 で とい

ならず紫の字をかへしまはしてデなすハ旅路をまとひあそびしく

拾 なすられたるゆへにかへされてかへりおもきなり はるかにそデ たちかへり 御かへ

長 又 何にて といふ 詞をふりしぬやうにあるもかはり

秋 いかでくをとこハあはれしおもめの姉こうとどめてたまふ人のあき

この詞にてデ たつ人にたのまれてかめるにあるみちよ風のそらん

これしもなにぐのこころなきなりつ事

○其二 きてしにて といふ 装の往をうく 将の字なるこころかなへり 里同

又 いかでく よしとい

手 あさむしそういにてくしキッチ 秋の野にさしくもある風の神それ

御氏 つまするかしかてモッチ ゆくもむなしけなのかかる嵐かけにきのふを

又 するかしかて折にてきこえる折りてや川さそなをつくる御ゆ

あらし

〔て〕といふ詞は何をものしたにいふごとし。又装をうけたるをも〔乃で〕と
何ハ名脚装の引靡状乃往也　三例○第一〔名して〕といふ　名装の引靡状を承　里〔で〕
里をはじめ今すこしいひやすく枕草子ぬすびとのいへる
そらのあけてよかゝるたぐひあり
今はいとあやしく人もかき侍るは八重むぐらしてかどさしたる
伊勢物語に女の婿むかへてまぎらはしておのれを
よめる詞を里にいはむにかはらず。又彼里にて
あとにはかはりもあらず
○第二〔あゆひして〕といふ　脚をうく　里〔は居て〕〔でござって〕すといひて
〔別して〕〔すぐして〕すすてとるむ時。只かはらず

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　デ有テ
人の身もならはしものをあはずしていざこゝろみむ恋やしぬると　ニ井テ
〔あはずして〕〔バ有テデ有テ〕
〔デナウテ〕ならはしなど
○第三〔さあして〕といふ　状乃往をうく　里〔て〕といふ
新古　おほかたの秋くるからに身にしめるやいかなるゆふべなるらむ　ウテ
人のおやのこゝろはやみにあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな
なかなかにとのをいふ

〔加保家〕
〔かほか〕　何ハ名事の往　状の末脚也　里〔ていやうすて〕又やうて〔ハ〕〔うるすぞ乃やう〕
さらぬなし
後　うる時さこそとよめる時は事あるかなにうつりきぬなそ　方何ガ有ウニ

加保 那加良

金葉 むかしあるじかほにて梅うゑの花こそ秋をまつの所ち
古今 ちる菊のちらぬハかさならんもしはるの春ハ風をもうらむはなの色
御裳濯河合に定家卿判して見せつかはしとて宮とく
右合なるふるきのへさしてあやしき歌はきまことよみ侍るを
かく今又衣笠内府のおかしさとふもを好へりとも赤染相
なりと雖さそれ意をも何の心といふ事彼ていふまなく
よろしき名なるハ実にあはさまことよりそなるべし ○古今よみ
かゝかなる伊せ物ってハ心からへぬ物の法など廃とうける
ハ只名なりと心得べし

那加良家

何ハ名事の社孔在の来又在先のむ 又仍鋪乃来又ハ廃助御ホ仍まくせ 二詞全同

里なりになすかでとていよれはよのまことにしつ恋てよりなかり
えらしひすてなとてもぬ心なかの 引鹿の時ハ例ののりをとりへて見るべし
ちゆの家こむ君ぬりんとよいかよしらむ心を枝なりしみさ
枝 打つまにて常にならるぞ折らうことよの花ハ花さてちらの
猿枝猴 さかととも志もあぬいのちなつきぬるや何しきなりに此さのと有ちるま
なりも しなりも なりの しなりらむ ホカハホ打ちさせ
うくる時 何とめ といふ心をまことゆかしきあの枝なりけみなてそれ
かくてかぞうよのかちなる所なりまる都と打のめしをうちるる
時事と心得えなるにを里てそようえいふひなりとうかしもを
打し例の いを とかろく哀なし里て いよといなの といひ
作なり

すゝみのあきなんてうな月とは、いはひくはきなきゝなれもこほるゝふ
雅にもまよりすれこひをうしくえのきねとくもめつくまゝみし
日しられそもあまてるやしいはひおもしし月わかりのみ人ふしゝゐる
をとれそあまてるやしいひおもしし月よかりのみ人〳〵ゆゝる人ふ
何まく
近昔ころかもかまくはもしろきくそのこよある
〔何ハ果の門〕
藤御遊
中若乎ころ、まくはと
乃まくはりもみなもかく。星の
さかしぶみ
ねるはかりやのそ
もまひてくそ
ささはらを。又のまくとうら胸を、浦とくのとをりて
星のくさよし
接
なかねのいひきまくはうなち月とおもひとかくみなかつる
〔オホレダイニ〕
接
ものしきうのはをもしやみもそえあすこよなるきしし
〔タツレンダイニ〕
接
向ちの浦月のむとうかまてゝ、かねのまくしさかりなふへるか
〔ヒレンダイニ〕

何まくの乃まくの事かた抄
〔テンニフタツ〕〔レンダイノ〕〔レンダイノ〕
里ちの まく ハ男まちく祝まゝなまく若をもうけみゝゑ
あそら云も、かの金うあらねえゝおそ寸 ○ あらそ と まく
何ゝろやうなりなる祝也。但 あゆくハゆくわくうつぬかのり
ゆゝとつりそうしこう若すてすて至ぶころをいひ まく ハか
ありうとくあるつきてゆくみをいぬかたのうかあてゝ里
言すそろしるへし
何まくし
〔何まくに〕
同
里の謎をうら一面 何乃まく とのとよめがち まく とい角の
あへろゝなとももみてられと、かわくハ若又ハ
わゝるぞいえろゝまかありて里言もおゝの 乃まく と同しく
おつ風し

あらしの山のまに〳〵(シダイニ)かくれなむとかや常にはいふなるか
拾 山かせのよき人の詞(シダイニ)しかみな葉はこのもかのもに散ぬる也
拾 みちのくのあさかのまに〳〵(シダイニ)ゆきみ侍ことはおもふことゝも
上 世のあめのまに〳〵はやりて今の世あめのまに〳〵なれは又中務集あり
古 岸乃海のさわくかせふきてよめるは前僧正うたまのまに
のこる詠めり まく まにく 同し詞なり
いまはた まにまにともよみて古今集にはまにまに
らんといふ言葉一なるにて枕詞には海のまにまとあのまく まにまに
まふく 言ひ如前

かてら
加天良家
此は事の往也又此をうくるも往事のまにかり かて はかりそめところ ら は 良家 なりか

里門又 ころく とみえかさしの やまと はいふ詞也すくなり
やりて はあめのまにまに花見のそのかしこ行よしの山の藤
ゆき月夜のそらにねてすむ里のとや
おきつしまにて御ののほうちねてぬる人のこのよふさそはめ
まつやとの花見の かきくる人ちるむしかるへき
きぬ人のころ吹いはれきあふにたすへつる花かわる
上古のうた かてら とよめる古哥あゆひ抄

あゆひ抄巻三終